

シチューと大根



小口 眞美

私が子ども達とすごしている幼稚園は、小学校との併設です。子ども達は、お昼に、お弁当を持って来ますが、職員は小学校の給食をもらいます。給食には、子ども達がお弁当箱に詰めて来られないメニューもあります。先日、その一つのクリームシチューが出ました。トレイをテーブルに置くと「あっ、いいな」「いい、におい」と子ども達が首をのびして来ます。その日は、たまたま出張や何かで食事をとらない先生が複数いたのでシチューはたっぷり余っていました。「お茶のかわりにシチュー飲む？」と尋ねると「うん、のむのむ」と力強く返事する子や、もう椅子を立ててコップのお茶を空けに行く子。

「おいしーい」「あったかい」「トウモロコシも入ってる」「ほんと？」と言いながら嬉しそうに食べている子ども達をみて、私はちょっとした満足感を味わいながらゆったりと食事をしていました。と、E子が「ねえ小口先生の味がするシチューがあったらいいね。私、おかわりして食べちゃう」と言い出しました。この時、子ど

も達の関心の主役はシチューだったはずなのに急に自分にそれがまわって来て、それが突然だったこともありませんが、「私がシチュー？」という意外な内容にも驚いて、私はジャガイモが喉につまってしまったような気分になり物が言えません。

それまでシチューに顔をうつ向け口に運んでいた子ども達が、E子の話に顔をあげ、見合せながら「うん、うん」「おなべにいっぱい作ってね」などと柔軟に対応し語り合っている情景と私との間に透明な壁が出来てしまいました。三匹の子ぶたのオオカミのシチューが思い浮かびました。でも、子ども達がこんなにやわらかな表情で残酷なことを言うはずがないと思ひ直し、それでは、もしかすると「担任の干渉を断ち切りたい」という潜在意識の表れかもしれない、などと思ったりしました。けれども「食べる」というのは自分のからだの中にとりこむことです。「先生の味がするシチュー」という架空の食べ物の場合は、心の中に取りこむということでしょう。それを「したい」と言うのですから「先生、好き」

というメッセージの手法と考えてもいいのではないかしら、というところに思い至り、やっと壁が消えてくれました。それでも、その後、何か他のメッセージも入っていたのではないかと、気にかかっています。

K男は、今年の四月、五歳児になってからこの学級を担任した私にとって、とても気になる存在でした。自分に対して、強くあらねばならない、かっこよくあらねばならない、人にあなどられてはいけない、というような課題を課していて、実際に他の子はK男に一目置き、従うようなところがありました。幼稚園で他の子と同じ時間をすごしているのに何倍も気を使い、強そうにしているのに本当のところは疲れているようでもありました。このK男とどれだけ心を通わせられるか、というところに、私の存在の意義がかかっているように感じられました。その後、いろいろな経過があり、何か事が起こるとポキッと折れてしまいそうな硬さのあったK男は、柔軟な強さを持つようになりました。自分の心情を素直に出

し、友達の心情に添う心地よさがわかってきたのか、顔がくしゃくしゃになるような笑顔がみられるようになりました。

ある日、そのK男のお母さんに廊下で呼びとめられました。「先生、私もうショック。情けなくて。あの子、こんな絵しかかけないのかしら」廊下の掲示板にはその時、芋掘りの時に近くの畑で抜いてきた大根の絵が貼ってありました。

大根を抜いてきた次の日、保育室に幼稚園用に抜いて来た大根を寝かせて置いておきました。葉は畑に生えていた時に似せて広げてあります。渋味のある抹茶色の全紙を縦半分に切り、おおかたの子の登園が終わったところで、私はバステルで大根の絵を描き始めました。この時には、「できたら子ども達にも昨日の感激を思い起こしながらかいてほしい」という願いがありました。

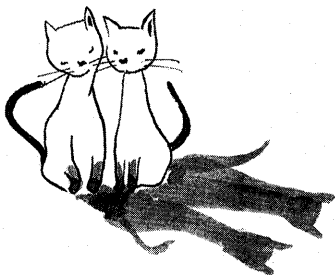
「なにしてんの？」

「大根、食べて無くなっちゃわないうちにかいておこう

と思つて。こーんなに大きいんだし、自分で抜いたの初めてだから、何だか嬉しくつて」

「ふーん」

ところが、かいているうちに面白くなつてきて、あま



り子ども達の様子も気にならなくなりました。

「だいこん、かいてるの？」

「そう」

「きのうのだいこん？」

「そう」

「うまいね」

「そうかな？ うまくてもうまくななくてもいいの。なん
だか、かいてたらどんどんかきたくなっちゃって」

「かみ、もっとある？」

「ある」

「どこ？」

「えーっと、あそこのテーブルの上よ」

「一まいもらうよ」

「どうぞ」

というような具合で、結局全員が大根の絵を描いたので
す。子ども達が描き始めると、私は描き続けることがで

きなくなりました。子ども達には、モデルの大根は必要
ないようでした。とげの痛さを、まだ指で覚えている子
は、黒のパステルで立派なとげを沢山描きます。抜いた
時の大きさを自分の背丈と比べて覚えている子は寝転ん
で大きさをばかり「先生、紙たりない。もう一枚もらう
よ」とテーブルで紙をつなげています。自分で抜いた途
中で曲がった大根を愛しむように思い出しながら描いて
いる子もいます。「葉っぱがさ、太陽のエネルギーを運
ぶんだよね」と言っている子の葉は立派です。自分なり
の表現をしながら、自分とは違う友達絵の絵も心地よく受
けいれている雰囲気涙が出そうでした。素直で、のび
のびとして、自信に溢れている姿を前にして、指導上の
環境作りとはいえ、下心から始まった自分の絵が恥ずか
しくなりました。

実はこの日、K男は欠席でした。そして、次の日、出
席したK男は、テーブルの上に重ねてあった大根の絵を
登園早々つけて「これどうしたの？」とききます。そ
の言葉の中に、「自分がいけない時にこういうことをする

のか？」と軽く責めるような気持ちを感じました。K男はその絵から、自分以外の学級のメンバーがすごした充実した時を感じとったのではないかと思えます。それを素直に受ければよかったのですが、私は、つい「そんなに大したものじゃないのよ」と伝えてK男を安心させようと思ひ、努めて軽い調子で「畑で抜いてきた大根かいてみたの」と言いました。K男がききたかった内容は、そんなことではなかったでしょうに。K男は、私のごまかしを責めようとはせず、自分も描きたい、と思い詰めたような表情で言います。K男は大根を描きたかったのではなく、共にすごせなかった時に少しでも近づきたかったのでしょう。描き始めて少し経つと、「はい」と私に手渡してくれた大根は、細く弱々しい線で描かれ、今にも、紙の色にとけてしまいそうでした。

母親にシヨックを与えたのはこの大根です。揭示しようか迷っていたのですが、K男が「みんなと一緒にはってね」と言ったのに心を決めて、全員の大根の絵をはることにしました。もっと深い思慮が必要でした。

母親とは、四月からのK男の成長やそれに伴った苦しみや頑張り、そして、この絵が描かれた状況など伝えながら、しばらく話をしました。描き始めてはみたものの、自分のいかなかった時に、いようとすることは不可能と感じ、手をひいてしまったK男の悲しさが絵に表れていることも。しかし、いくら言葉をつくしても、一枚の我が子の絵から受けた母親の失望を消すことはできませんでした。

学級の子ども達は八人です。たったの八人ですが多い人数を受け持っていた時より、ひとりひとりの子ども達とのかかわりは深く、私が与えてもらうもの、おしえてもらうものも多く、重たいのを感じます。この幸せをきちんと受けとめ、もっと、子ども達と誠実にかかわっていきたいと思います。

(東京都千代田区立永田町幼稚園)